

最新統計

人口の推移

(単位:人)

市町名	平成17年 10月1日	平成22年 2月末	平成22年 3月末	平成22年 4月末
気仙沼市	78,011	75,235	74,926	74,849
南三陸町	18,645	17,832	17,815	17,780
合計	96,656	93,067	92,741	92,629

世帯数の推移

(単位:世帯数)

市町名	平成17年 10月1日	平成22年 2月末	平成22年 3月末	平成22年 4月末
気仙沼市	25,510	26,616	26,578	26,676
南三陸町	5,335	5,364	5,365	5,367
合計	30,845	31,980	31,943	32,043

**平成21年9月1日に気仙沼市と本吉町は、
合併しました。**

気仙沼魚市場水揚げ実績 (数量:トン,金額:千円)

漁業別	平成21年(暦年)		前年同期比	
	数量	金額	数量	金額
鮪延縄	799	344,697	277	69,680
鯉一本釣	-	-	-	-
秋刀魚受網	-	-	-	-
近海大目流網	97	22,326	21	6,475
旋網	-	-	-	-
定置網	8	11,114	3	1,897
船凍鮪延縄	-	-	63	17,242
冷凍いか釣	-	-	-	-
曳網・抄網	3,202	195,084	187	42,318
搬入	223	221,501	39	26,029
その他	42	23,298	21	10,288
合計	4,371	818,020	521	51,973

平成21年(暦年)水揚げ実績は、前年度比25.4%減と大きく割り込み、金額では昭和49年以来35年ぶりに200億円割れとなった。

「認知症ケア資質向上研修会」の開催

(気仙沼保健福祉事務所地域保健福祉部成人・高齢班)

気仙沼保健福祉事務所では、5月12日に、認知症地域ケア推進事業の一環として、介護保険施設・事業所の方々を対象に、三峰病院の連記院長を講師に迎え「老年期における幻覚・妄想～認知症をより深く理解するために」と題して研修会を開催しました。

認知症は、記憶障害に加えてそれ以外の認知機能障害(失語、失行、失認などの判断力の障害や実行機能障害)により社会生活・対人関係に支障があり、うつ病などではないものが認知症とされます。



(研修会の様子)

老年期になると認知症の発症などにより、幻覚・妄想がおこることがあり、身近な人や物に対して、侵害妄想やものとりれ

妄想などの現実的なかたちで現れます。

高齢者に見られる多くの幻覚・妄想は家庭的、社会的孤立状況を契機として発症します。妄想性の障害、認知症などの老年期の様々な障害の予防、治療、進行の緩和には、家族、介護スタッフとの信頼関係と安心できる居場所の確立が重要となります。

当日は、150人を超える方々に参加いただき、今後の高齢者への対応の参考となる有意義な研修会となりました。

植樹活動と森林・林業体験発表会の開催

(気仙沼地方振興事務所農林振興部林業振興班)

平成22年3月4日、気仙沼市本吉地域の小中学生が「植樹活動」と「森林・林業体験発表会」を行いました。植樹活動は、町内の4カ所にスギ挿し木(低花粉)200本、松くい虫抵抗性クロマツ150本、ソメイヨシノ3本、モミジ1本を植樹しました。

森林・林業体験発表会では、モ～ランド本吉の研修館「まきばのがっこう」で、3つの小中学校が1年間



(森林・林業体験発表会の様子)

の環境緑化活動の成果を発表しました。地元の森林組合、北部森林管理署や地域住民の方と協力して励んだ成果がパワーポイ

ントで上手にまとめられていました。

今回の事業は、主催者である県緑化推進委員会と気仙沼市に協力し、林業普及指導員が学校への働きかけや苗木の手配、事業全体のコーディネートを行ったものです。

気仙沼・南三陸地区

原木しいたけ生産者交流会の開催

(気仙沼地方振興事務所農林振興部林業振興班)

平成22年3月5日に気仙沼・南三陸地区の原木しいたけ生産者を対象に情報交換や生産技術・販売手法の向上を目的とした交流会を開催し、管内の生産者7名が参加しました。

今回は、みやぎグリーン・ツーリズム派遣事業を活用し、みやぎグリーン・ツーリズムアドバイザーの足立千佳子さんを座長に意見交換を行いました。



(技術的問題を中心に意見交換の様子)

新規参加者がベテラン生産者からアドバイスをもらうなど生産者同士の交流

を深めることができ、また、次回は秋に開催してほしいと要望が出るなど有意義な交流会となりました。

自然観察会・ツリーハウス作り体験会の開催

(気仙沼地方振興事務所農林振興部林業振興班)

里山の再生を目的とした当事務所事業「南三陸里・山のちから再生事業」の一環として、3月14日に南三陸町ひころの里で自然観察会・ツリーハウス(秘密基地)作り体験会を開催しました。

午前中、2班に分かれて自然観察会を行った後、午後からは4班に分かれて間伐材を利用したツリーハウスを作りました。

自然観察会では、南三陸入谷地区の自然・森林環境を体感することができ、ツリーハウス作りでは、子供より大人のほうが夢中になって取り組むなど参加者は楽しい1日を過ごしました。



ツリーハウス(秘密基地)自作!

耕作放棄地対策推進研修会の開催

(気仙沼地方振興事務所農林振興部農業振興班)

気仙沼・本吉地域は森林や傾斜地が多いことから、農業生産上不利な農地が多く、高齢化等による担い手不足もあり、耕作放棄地が増加傾向にあります。また、耕作放棄地は野生鳥獣の隠れ家となりやすく、周辺農地へも悪影響を及ぼします。そこで、耕作放棄地対策の一環として、平成22年1月25日に研修会を開催しました。

始めに、財団法人自然環境研究センター研究主幹の常田邦彦氏から、野生動物による農作物被害にどう対処したらよいかについて御講演をいただきました。また、福島県二本松市のNPO法人、ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会副理事長の武藤一夫氏から、地域づくりを通じた耕作放棄地の再生・活用の事例発表をいただきました。今回は二人の講師を迎え、野生鳥獣による農作物被害

防止技術や耕作放棄地の有効利用に関する知識を習得することができました。今後も



(研修会の様子)

研修会等を開催し、耕作放棄地対策の支援を行っていく予定です。

大唐桑を利用した商品開発に向けて！

(気仙沼地方振興事務所農林振興部農業振興班)

気仙沼市唐桑地区では、地域おこしの一環として平成15年から「大唐桑」という桑品種の栽培普及に取り組んでいます。県では大唐桑の利活用を支援する取り組みの一つとして平成22年3月2日に気仙沼市唐桑町公民館で早坂具美子フードコーディネーターを講師として大唐桑を栽培している方々を対象に研修会を開催しました。

良品は基本的にそのままです。半端物(規格外品)を加工し付加価値を付けて売る。もち加工品や和菓子は農産加工品に向くが、洋菓子やパンは原材料のほとんどを購入しなければならないので自家農産物が活かせない。加えてパンは設備投資に係る費用が大きい等々、早坂氏から農産加工に関してわかりやすく適切なアドバイスがありました。健康によいとされる桑の利用がより一層広がることが期待されま



(商品開発の様子)

「第15回三陸気仙沼の求評見本市」の開催

(気仙沼地方振興事務所水産漁港部水産振興班)

平成22年2月16日(火)に気仙沼市のサンマリン気仙沼ホテル観洋において三陸気仙沼の物産展実行委員会主催による「第15回三陸気仙沼の求評見本市」が開催されました。気仙沼の水産加工品を全国に紹介することで、より一層の消費拡大とブランド化を目指している求評見本市ですが、今回は、気仙沼市と本吉町の合併を記念し、「食の魅力発信と未来への挑戦」をテーマに、水産物のみならず農産品

や乳製品等も交え、参加した35社から300を超える様々な商品が出品されました。会場では積極的に商談会が開催されるとともに、メカジキの解体実演や食体感フェア、また、三陸気仙沼の加工流通塾と題した講演会等も行われ、全国はもとより韓国、香港など海外からも訪れた約300社、700名を超える人々が「気仙沼の味覚」を体感しました。

求評見本市を通じて気仙沼の味を広くPRするとともに、寄せられる様々な意見をもとに新たな商品を開発することで、気仙沼ブランドが全国の消費者に一層愛されそして信頼されるものと思います。



(フェアの様子)

宮城県漁業協同組合大谷本吉支所女性部

「おばちゃん倶楽部」が

全国青年・女性漁業者交流大会で表彰

(気仙沼地方振興事務所水産漁港部水産振興班)

平成22年3月7日～8日にかけて東京国際フォーラムで開催された、第15回全国青年・女性漁業者交流大会へ本県代表として、宮城県漁業協同組合大谷本吉支所女性部「おばちゃん倶楽部」が参加しました。おばちゃん倶楽部は、多彩な地場産品を活用した多くの魅力ある加工品を道の駅「はまなすステーション」や隣接する「気仙沼市本吉町農林水産物直売センター」で販売を行うとともに、地元食材を利用し

た料理教室や旧本吉町への学校給食へ地域食材を



(齋藤部長の様子)

提供するなど地産地消、魚食普及に尽力し、その活動が認められ県代表として全国大会へ推薦されたものです。

大会当日は、流通・消費拡大部門において、トップバッターとして齋藤部長が「みんなの笑顔が元気の源～味、技をつないで13年～」と題して、堂々と日ごろの活動の発表を行った結果、JF全国女性連・JF全国漁青連会長賞を受賞しました。

豊かな食材を活用した気仙沼・本吉地域の食文化が継承されるよう、ますますの活躍が期待されます。

春を先取りして繭の花が満開に！

(本吉農業改良普及センター)

3月6日(土)から14日(日)まで、「シルクフラワーフェスタ in 志津川2010」が、南三陸町入谷の「ひころの里」で開催されました。

この催しは、気仙沼・本吉地方をはじめ、登米市、大崎市、栗原市などの蚕糸加工者で組織する仙北地方蚕糸加工者連絡協議会の会員が、繭を使って製作した作品を展示販売するものです。

会場となった「ひころの里」シルク館では、繭で作られた色鮮やかなツツジや梅、福寿草などの鉢物、コサージュやひな人形など約1000点の作品が展示され、一足先に春

の雰囲気を感じ出していました。このほかにも鯉のぼりや干支の寅などの小物も人気を集めており、開催2日目には農産物の特売



(シルクフラワーフェスタの様子)

コーナーも設けられて大いに賑わいました。

提供するなど地産地消、魚食普及に尽力し、その活動が認められ県代表として全国大会へ推薦されたものです。

「JA南三陸管内アスパラガス生産研究会」の設立総会が開催される

(本吉農業改良普及センター)

気仙沼市本吉町では、地域で生産される有機肥料の活用を目的として、平成19年度からアスパラガスの生産振興が行われてきました。平成21年度には生産者42名、栽培面積4.4ヘクタールの規模にまで拡大し、これまで生産者と関係機関で生産組織の立ち上げについて打合せが行われてきました。

このたび、気仙沼市本吉有機肥料センター利用組合および関係機関からの提案により、3月23日に気仙沼市本吉公民館において、

「JA南三陸アスパラガス生産研究会」の設立総会が開催されました。研究会は



(設立総会の様子)

27名の生産者

で組織され、地域内から産出されるたい肥を活用しながら、アスパラガスの栽培技術向上を図っていきます。

干し柿生産の復活を目指して講習会を開催

(本吉農業改良普及センター)

南三陸町入谷地区はかつて干し柿の産地でしたが今は衰退し、地区外への出荷が途絶えてから長い年月が経っています。このほど地区内の有志らが、遊休農地に柿を新植して共同作業による干し柿づくりを復活させたい、という計画を持ち、賛同者を募るため座談会を開きました。

当日は干し柿づくりに関心がある者13名が集まり、普及センターが柿の植栽や栽培管理、干し柿の作り方等について講習を行いました。

参加者らは質疑を通して取り組みの内容を理解し、発起人の呼び掛けに応じて、JAを通して苗木と必要な資材を共同購入する話がまとまりました。

普及センターでは中山間地で干し柿づくりを目指す動きに注目し、新技術の導入を支援して、地域の

農業所得の向上と集落活動の活性化を目指していきます。



(講習会の様子)



(意見交換の様子)

気仙沼地方行政連絡調整会議等の開催

(気仙沼地方振興事務所地方振興部商工・振興班)

平成22年5月10日(月)、平成22年度気仙沼地方行政連絡調整会議及び地元選出県議会議員との意見交換会が開催されました。

調整会議では、共同参画社会推進課の猪股多恵子専門監から“共同参画社会の推進について”というテーマで御説明いただきました。説明では、1)共同社会推進課の紹介、2)地域課題・職場課題(男女共同参画の視点から)に関するお話があり、今後のワーク・ライフ・バラ

ンス(仕事と生活の調和)及びセクシャルハラスメントについて大変貴重なアドバイスをいただき、共同参画社会の重



(調整会議の様子)

要性やその手法を学ぶことができました。

また、意見交換会では、圏域の産業振興等に向けた取り組み等について、気仙沼・南三陸選出の県議会議員と情報交換を行い、貴重な意見をいただくことができました。

「徳仙丈山つつじ祭り山開き」が開催される

(気仙沼地方振興事務所地方振興部商工・振興班)

気仙沼市にある徳仙丈山の日本吉町側登山道入り口で5月15日(土)に“徳仙丈山つつじ祭り山開き”が開催されました。

主催する徳仙丈山つつじ祭り実行委員会のメンバーや宮城県気仙沼地方振興事務所、気仙沼市などの関係者約4



(山開きの様子)

0人が参加し、今シーズンの山開きを祝いました。

徳仙丈山は、日本でも珍しい自生つつじの山脈として知られており、気仙沼・本吉地域を代表する観光資源、観光名所となっております。今年は、5月下旬か6月はじめにかけて見頃になりますので、真っ赤に彩られた綺麗な山を眺めに、是非、当地域に足を運んでみては如何でしょうか。



(徳仙丈山のつつじの様子)

酒米サポーターズクラブによる 田植えが行われました！

(気仙沼地方振興事務所地方振興部商工・振興班)

5月15日(土)、気仙沼市の酒米サポーターズクラブが、市内の廿一(にじゅういち)地区の酒米栽培田で、昔ながらの手植えによる田植え作業に取り組みました。

酒米サポーターズクラブは、廿一地区で行われている酒米「葎の華」づくりを支援しており、地酒づくりに興味や関心がある一般市民や県職員、気仙沼市職員などの有志で構成されています。

田植えは今年で9年目になりますが、今年も約30名の参加者が、酒米「葎の華」の苗の田植えを行ない、五月晴れの暖かい日差しのもと心地よい汗を流していました。

参加者からは、「昨年より水が冷たかったが、田植えをしたコメからできた新酒を味わうのが楽しみ」との声が聞かれました。

今後、7月の草取り作業など経て10月中旬頃に稲刈りをし、市内の酒造業者により造られた地酒を来年2月下旬に開催される試飲会で味わう予定となっています。



(田植えの様子)

【あとがき】

～ 地域の財産づくり ～

2月の津波被害の爪痕がまだ残る湾内も、季節は夏に向かって急ぎ足で進んでいます。海は蒼さを増しながらサケ・マスやサワラなど寒暖両方の魚を育み、山々は新緑の薄いベールと朱いツツジの帽子でめかし込み、水田ではか細かった稲が少しづつ存在感を示すようになってきました。この地域が躍動感を強める今の時期ですが、今年は大陸道の延伸効果もあり黄金週間の人出が多かったようです。

そんな連休の合間のお昼時、市内の寿司屋さんでの一コマ。気仙沼ならではのメカジキのコーゲンを食べた関西の女性が「帰ったら、若返って亭主に惚れ直されるわ！」と感想を。すかさず大将が「旅行で変なことがあったのか心配されるよ。」と突っ込みを入れ、店内は大爆笑。

食材をはじめこの地域の魅力と潜在力を発信し、想いを共有するためには大将のような軽やかな行動力のある「人財」が欠かせません。多くの人を訪れる好機を迎える今、私たちはこれらの方々と一緒に志の下、大きな意味の地域の財産づくりをすすめたいと改めて意を強くしました。